

琉球大学学術リポジトリ

毛有慶『竹蔭詩稿抄』 (資料紹介)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2007-06-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上里, 賢一, Uezato, Ken-ichi メールアドレス: 所属: |
| URL | http://hdl.handle.net/20.500.12000/383 |

資料紹介

毛有慶『竹蔭詩稿抄』

上里賢一

凡例

- 一、本稿は、筆者所有の写本「竹蔭詩稿抄」を活字化し、訓読と簡単な注を施したものである。
- 一、写本は、「琉球雜纂」の表題をもつもので、「中山伝信録抄」、「中山詩文集抄」、「東遊詩草抄」（「東遊草」の抄本）、「竹蔭詩稿抄」からなっている。
- 一、筆写者は、「成島秀子在家 情野縫殿助」の署名からして、情（或いは清）野縫殿助と言ってよからう。この人物と沖繩との関係については、今のところ不詳だが、恐らく明治末から大正期にかけての或る時期に沖繩に滞在して、沖繩県立図書館等にあった琉球の漢籍から、詩文を中心に写したものと思われる。
- 一、筆写の時期は、「甲子二月念九夜三更抄了、於那覇港頭花月楼」とあるから、一九二四年（大正十三年）、二月二十九日の夜写し終えたことがわかる。
- 一、『竹蔭詩稿』は、現在その原本がなく、その全体の姿は明らかでない。『沖繩毎日新聞』、黒頭巾（横山健堂の筆名）『薩摩と琉球』（大正三年・中央書院）、伊佐早謙君纂輯『琉球文伝』（沖繩国際大学南島文化研究所蔵『沖繩県資料 上杉県令沖繩関係資料 近代四』所収）等に作品の紹介がある。これらの資料にある作品は、

大部分が互いに重なるものだが、文字に異動があったり、明らかな誤写があったりする。その中で『竹蔭詩稿抄』は、収録作品の数が他のどの資料よりも多いことが特徴としてあげられる。ちなみに、『薩摩と琉球』は、摘句を含む十九首の詩と「静観齋学則」の一章を収録しており、『琉球文伝』は二十七首（目録には二十八首とある）を収めるが、『竹蔭詩稿抄』は、二十四題四十三首と「静観齋学則」十二章を収録しており、現在のところ毛有慶の作品集としては、最良のものと言える。

一、本稿では、それぞれの写本を校合して文字の異動を示した。その際、黒頭巾『薩摩と琉球』は黒、『琉球文伝』は文と略した。

一、原本は、草書・行書などが多用されているが、本稿では原則として旧漢字に統一した。

一、俗字、異体字、本字、別体等は、通行体の文字にした。

一、本稿に収録してある作品の一部を使用して、琉球王国末期における毛有慶の行動と心情を述べたものとして、拙論『琉球漢詩・最後の光芒―毛有慶（亀川盛棟）に見る抵抗の形』（『文学』一九九八年夏号 岩波書店）がある。参考になれば幸甚である。

『竹蔭詩稿抄』

琉球毛有慶著

有慶以文久元年十二月廿八日生以明治二十六年七月十七日死于福州 享年三十三

有慶は文久元年十二月廿八日を以て生れ、明治二十六年七月十七日を以て福州において死す、享年三十三なり。

閩遊艸

初到福州 甲申九月二十一日(其一) 初めて福州に到る 甲申九月二十一日

霸水望秋零

霸水 秋零を望む

哀鴻不忍聽

哀鴻 聴くに忍びず

御書逃虎口

書を御みて 虎口を逃がれ

凌浪渡鯤溟

浪を凌いで 鯤溟を渡る

晝檢南閩針

晝は檢す 南閩の針

夜觀北斗星

夜は觀る 北斗星

雲帆幸無恙

雲帆 幸いに恙なく

飛過暮山青

飛びて過ぐ 暮山の青

(其二)

秋風送客舟

秋風 客舟を送り

更喜片帆收

更に喜ぶ 片帆を収むるを

五虎填蒼海

五虎 蒼海を填し

三山擁福州

三山 福州を擁す

郷情隨浪廻

郷情 浪に隨いて廻り

旅況逐詩稱

旅況 詩を逐いて稱む

柔遠皇恩渥

柔遠の皇恩^{あつ}渥く

雁行拜冕旒

雁行 冕旒を拜す

○五虎 閩江の河口にある。五頭の虎が伏したような形の岩で、海を行く者の目印となり、福州のシンボルともなっている。○三山 福州市内にある三山。福州のこと。東の于山（九仙山・九日山）、西の烏石山（閩山）、北の越王山（屏山・冶山・泉山）。○冕旒 冕（かんむり）。天子から大夫までが儀式に用いるものがの前後にたれさがる飾りの玉。

閩中江山 五絶三首（其一） 閩中の江山 五絶三首（其の二）

呈秀三山地

秀を呈す 三山の地

正襟坐海隅

襟を正して 海隅に坐す

巍々威擁蜀

巍々として 威 蜀を擁す

渺々勢吞吳

渺々として 勢 吳を吞む

（其二）

（其の二）

雲霞銷寶區

雲霞 寶區に銷え

天下是機樞

天下 是機樞なり

水色疑深淺

水色 深淺を疑う

山形誤有無

山形 誤り有る無し

○寰區 天子の治める土地全体。天下。世界。○機樞 石弓のばねと、戸のくるる、転じて肝心なところ。
(『淮南子』・泰族)

(其三)

江山雁字連

江山 雁字連なる

崑崙没青天

崑崙 青天に没す

景在清秋節

景は清秋の節に在り

牽雲勢欲眠

雲を牽く勢い眠らんと欲す

有感

感有り

遊宦歸何日

遊宦 何の日にか帰らん

蹉跎水一方

蹉跎す 水の一方

榕城非我土

榕城は我が土に非らず

琉館是他郷

琉館も是れ他郷なり

酌酒情逾切

酒を酌めば 情逾いよ切なり

吟詩意更長

詩を吟ずれば 意更に長し

恨看歲將暮

恨みて看る 歳の將に暮れんとするを

低首徒悲傷

首を低れて 徒に悲傷す

夢游家郷

夢に家郷に遊ぶ

飄飄雲履蹈流霞

飄飄として雲を履み 流霞を蹈む

登望蜀樓日漸斜

登りて蜀樓より望めば 日漸く斜なり

轉歩太平橋上月

転じて歩む 太平橋上の月

驚醒更鼓尚尋家

更鼓に驚醒して 尚お家を尋ぬ

蜀樓在琉球西原郡末吉村之東 騷客酒徒所賞遊也 太平橋在虎館之北 是又花朝月夕管弦歌吹之地也

蜀樓は琉球西原郡末吉村の東に在り、騷客酒徒の賞遊する所なり。太平橋は虎館の北に在り、これ又花朝月

夕管弦歌吹の地なり。

南越徒爲客 時有送赴北京／近從琉球来 南越 徒に客と為る

南越徒爲客

南越 徒に客と為り

客中也送迎

客中 また送り迎ふ

悠悠無一事

悠悠として一事無し

只有賦詩情

只だ詩情を賦する有り

游南澗

南澗に遊ぶ

之子遊南澗

之子 南澗に遊ぶ

従流採白蘋

流れに従いて白蘋を採る

漁翁笑相問

漁翁 笑いて相問う

説罷各沾巾(黒に沾を沾に作る) 説い罷りて各巾を沾す

絶句

絶句

誰憐遠遊子

誰か憐む遠遊の子

自願又無謀

自ら願みるも 又無謀なり

恨滴三山月

恨は滴つ 三山の月

□光照女斗

□光 女斗を照らす

福州驛樓獨坐

福州の驛樓に独り坐す

緑水青山倦品評

緑水青山 品評に倦む

樓頭獨坐計前程

樓頭独り坐し前程を計る

擬望故國雲霞遠(黒に望を眸に作る) 擬望す故國 雲霞遠し

回首西南有雁聲

回首す西南 雁声有り

臨歸偶書壁

帰りに臨み偶壁に書す

無端離合宛浮萍

端無くも離合す 宛も浮萍のごとし

錦纜雲帆不可停

錦纜雲帆 停むべからず

惆悵分襟從此去

惆悵として襟を分ち 此より去る

天長海潤共蒼冥

天長く 海潤く 蒼冥を共にす

從福州回時中途遇逆風飄到太平山 福州より回える時、中途にて逆風に遇い太平山に飄到す

從發梅花浦 福州五虎門／南有梅花口

梅花浦を發してより

既迷白鳥洲 太平山有／白鳥口

既に迷う 白鳥洲

歸途犯波浪

歸途 波浪を犯し

逆旅作羈囚 時有獄／中之係

逆旅 羈囚となる

那覇獄中作

那覇獄中の作

獄裏操南音

獄裏 南音を操つる

凄々白雪吟

凄々 白雪吟

回郷家尚遠（文に郷を邦に作る） 郷に回えれど家尚遠し

受苦恨逾深 未到家庭／直到獄中 苦しみを受けて 恨み 逾いよ深し

○「南音」中国の南方の楚の国の歌。○「白雪吟」は、琴曲の名。高尚で唱和し難い曲といわれている。陽春曲と共に楚の歌曲。楚の国といえは、憂国の詩人屈原の国であり、毛有慶は琉球救国に献身して苦勞する自らを、屈原の運命と重ね合わせていたのである。獄中であって南音・白雪曲を操るとするのは、どんな責め苦に合おうとも、自己の操をけっして曲げまいとする決意の表明であり、琉球国の社稷を守り通そうとする精神の発露といふべきだろう。

光緒乙酉夏五月十九日坐駕琉船告辭離驛本年本月廿三日五虎門開洋中途遇逆風念五日飄到太平山不計投彼陷穽縲他獄中六月初四日警禁火輪船太平山解纜五日那朝收帆不下通堂直下監獄八月廿九日聞叔母之喪于獄中告哀願弔其情不許九月廿九日開放羈囚從此回家不勝慘歎之至因偶書五律四首

光緒乙酉の夏五月十九日、琉船に坐駕し、辞を告げて駅を離る。本年本月廿三日、五虎門より開洋す。中途にありて逆風に遇い、念五日太平山に飄到し、計らざるも彼の陷穽に投ぜられ、他の獄中に縲がる。六月初四日、火輪船に警禁せられ太平山より解纜し、五日、那朝收帆、通堂に下らず直に監獄に下る。八月廿九日、叔母の喪を獄中に聞き、哀を告げて弔を願へども其の情許されず。九月廿九日、羈囚より開放され此れより家に回らんとして、慘歎の至りに勝えず、因りて偶たま五律四首を書す。

(其一)

慷慨又何妨

慷慨 又何ぞ妨げん

爲囚歸故郷

囚と為りて故郷に帰る

獄中常見叱

獄中 常に叱られ

監外忽聞喪

監外 忽ち喪を聞く

猛憤隨波浪

猛憤 波浪に随い

幽魂戀澤梁

幽魂 沢梁を恋う

攀籠初解日

攀籠 初めて解かるる日

慟哭拜靈堂

慟哭して靈堂を拜す

○澤梁 沼地と梁。魚や草などをとる沼地。○攀籠 鳥獸を入れるおりやかご。自由を束縛するたとえ。陶淵明「帰園田居」に「久在攀籠裡」とある。

(其二)

駭々秣白駒

駭々 白駒まぐさかに秣い

曖曖晚桑榆

曖曖 桑榆くに晩る

脱矣他幽獄

脱したり 他の幽獄

歸哉我麗都

帰れるかな 我が麗都

荆妻忙煮鯉

荆妻 鯉を煮るに忙しく

稚子乍沾酤 (黒に沾を沾に作る) 稚子 乍ち酤を沾う

斟酌頻相勸 斟酌して頻りに相い勧む

脚杯却起吁 杯を脚むも却って吁を起こす

○駸々 速く進むさま。急速なさま。○曖曖 樹木がしげって暗いさま。○荆妻 自分の妻をへりくだっていう。いばらのかんざしをさした妻の意。○起吁 嘆き。うれいの声。

(其三)

今年始歸家 (黒に歸を返に作る) 今年 始めて家に帰る

歩園擇桑麻 (黒に園を圃に作る) 園を歩いて桑麻を擇る

旧幹猶交朶 旧幹は猶 朶を交え

新枝更卷芽 新枝は更に芽を巻く

清風吹偃草 清風 吹いて草を偃かせ

馴鳥下迷霞 馴鳥 下りて霞に迷う

倦處依鋤憩 倦む処 鋤に依りて憩えば

日西竹影斜 日は西に竹影斜めなり

(其四)

能親七尺節 能く親しむ 七尺の節

扶我就歸農

我を扶けて帰りに農に就く

灌漑離邊菊

灌漑す離邊の菊

栽培石上松

栽培す石上の松

山門青艸滿

山門 青草満ち

澗戸白雲封

澗戸 白雲封つ

竹榻涼無色

竹榻 涼として色無く

悠然聽晚蛩

悠然として晚蛩を聴く

復愁

五絶二十首（其一）〔文に二十首を十二首とする。同じく文に十二首の次に「節五音」の三字あり〕

復た

愁う 五絶二十首（其の二）

擊鼓六師催

擊鼓 六師催す

風雲八陣開

風雲 八陣開く

砲鎗震轟處

砲鎗 震轟する処

驚起臥龍才

驚きて起つ 臥龍の才

○擊鼓 攻めつつみ。騎兵が馬上で鳴らすつつみ。○六師 天子の六軍。一軍は一万二千五百人。

（其二）

城上乱風塵

城上 風塵乱れ

干戈恰似鱗（文に干戈を干才に作る） 干戈 恰も鱗に似たり

桃源若可到 桃源 若し到る可くんば

我暫避強秦 以王宮爲屯兵之處 我 暫らく強秦を避けん

○城上 首里の城。○桃源 陶淵明が描いた理想郷。○強秦 ここでは、明治政府（日本）のこと。陶淵明が描いた理想郷（桃源郷）に住んでいる人たちは、戦国時代の秦とその他の国々との戦乱を避けて、この土地に移り住んだもので、そのため、秦の後に漢や魏があることを知らなかった。琉球と中国との進貢関係の禁止等一連の日本併合過程で、首里城南殿は、いちはやく熊本鎮台分遣隊の武器庫とされている。

（其三）

登山青艸亂 山に登れば 青草乱る

渡水白駒嘶 水を渡れば 白駒いなな嘶く

歸路一廻首 歸路 一に廻首す

如何日漸西 如何せん 日 漸く西するを

（其四）

依依去塵世 依依として 塵世を去る

杳杳就幽栖 杳杳として 幽栖に就く

弱柳垂遮屋 弱柳垂れて屋を遮る

香木秀覆畦

香木秀でて畦を覆う

(其五)

分畝遶茅屋

畝を分ちて茅屋を遶う

牽湖澱棘門

湖を牽きて棘門に澱ぐ

桔槔挙飛鷺

桔槔 挙げて鷺を飛ばす

棹櫓振跳鼉

棹櫓 振いて鼉を跳ばす

○桔槔 井戸のはねつるべ。

(其六)

客遊不可尋

客遊 尋ぬ可からず

尋處更驚心

尋ねる処 更に心を驚かす

忘却女兒輩

忘却す女兒輩

今朝早及簪

今朝 早くも簪に及ぶ

(其七)

莫言道路難

言うなかれ 道路難しと

新道最平漫

新道 最も平漫なり

只怯行々處（文に處を客に作る） 只怯る 行々する処

朔風此夜寒 新造諸ノ方道路 朔風 此の夜寒し

（其八）

努力田園裏 力を努む 田園の裏

幽樓一枕安し 幽樓 一枕安し

何隨新教化 何ぞ随わん 新教化

不改旧衣冠 改めず 旧衣冠

○新教化 明治政府による新しい制度による統治。○旧衣冠 琉装かたかしら（琉球の髮型）

（其九）

游子思依依 游子 思い依依たり

蹉跎胡不歸 蹉跎して 胡ぞ帰らず

故園問風景 故園 風景を問う

日午掩柴扉 時有志縉紳家閉門守身 日午 柴扉を掩おほう

（其十）

樽酒酌三々 樽酒 酌むこと三々

狂歌興始酣
聊雖忘物我
白髮對花慙

狂歌興にして始めて酣なり
聊か物我を忘るといえども
白髮 花に對して慙づ

(其十二)

射波月始生
拂樹影逾明
□如焚香拜
金鷄鼓翼鳴

波を射りて 月始めて生ず
樹を払いて 影逾明るし
□香を焚いて拜するが如し
金鷄 翼を鼓ちて鳴く

(其十二)

縱横争利□
誰子着鞭先
羸得歸家日
滿頭白髮鮮

縱横 利□を争う
誰か鞭先に着せん
羸ち得たり家に帰るの日
滿頭 白髮鮮やかなり

養病 五律二首

(其一)

世事隨時變

世事 時に隨いて変わる

人情逐物遷

人情 物を逐いて遷る

欲棲心切々

棲まんと欲するに 心切々たり

未去思綿々

未だ去らざるに 思い綿々たり

夢裡看蝴蝶

夢裡に蝴蝶を見る

病中聽杜鵑

病中 杜鵑を聴く

君平論卜筮

君平 卜筮を論ず

身世共飄然

身世 共に飄然たり

○夢裡看蝴蝶 病中聽杜鵑 崔塗の「春夕旅懷」詩に「蝴蝶夢中家万里、杜鵑枝上月三更」とあるのを踏まえ
るか。当然、「蝴蝶夢」のことも意識にある。 莊子が夢でちょうになって楽しみ、自分とちょうとの区別を
忘れたという故事。(『莊子』・齊物論) ○君平 漢代、蜀の成都で易者をしていた隱者嚴遵の字。「君平卜」
とは、君平の卜筮のこと。名人のうらない。

(其二)

從不望名譽

名譽を望まざるにより

客稀髮懶梳

客稀なれば 髮梳るに懶し

全生遁市井

生を全うせんと市井に通る

養拙學樵漁

拙を養いて樵漁を学ぶ

天地曾非小

天地 曾て小に非らず

田園且有餘

田園 且つ余り有り

門前長五柳

門前 五柳長じ

垂幕擁蓬廬

幕を垂れて蓬廬を擁す

○門前長五柳

隠者として有名な陶淵明は、自宅に五本の柳を植え、みずから「五柳先生」と称していた

（「五柳先生伝」参照）。○蓬廬 ますしい住まいのこと。

贈馬維馨

馬維馨に贈る

悠悠離亂裏

悠悠として乱裏を離れ

邂逅結良儔

邂逅 良儔を結ぶ

愧我才情拙

我が才情の拙なるを愧じ

愛君徳業優

君が徳業の優なるを愛す

叩鋤鳴睡鷺

鋤を叩きて睡鷺を鳴かし

揮葉躍潜蚪（文に葉を筆に作る）

葉を揮いて潜蚪を躍らす

□□辭多士（文に□□を又手に作る）

□□多士を辞す

誰随物外情 時維馨登耕 畝／夜歸讀書

誰か随わん 物外の情

觸景書懷

景に触れて懷を書す

蟋蟀繞階鳴

蟋蟀 階を繞いて鳴く

千山落木清

千山 落木清し

樓頭時染草

樓頭 時に染まる草

天下人論兵

天下 人 兵を論ず

不改青雲志

改めず 青雲の志

因到白髮情

因りて到る 白髮の情

丹砂無覺處

丹砂 覺むる処無し

其奈學長生

其れ奈んぞ 長生を学ばん

○蟋蟀 こおろぎ。

○丹砂 仙薬。硫黄と水銀の化合した朱色の鉱物。

冬日獨坐

冬日 独り坐す

北風吹雪觸庭樓

北風雪を吹いて庭樓に触る

然火金爐獨煮茶

金爐に火を然やして 独り茶を煮る

檻外烟篋鏘夏玉

檻外の烟篋 鏘夏たる玉

所思之人欲来乎

所思の人 来たらんと欲するか

○檻外

てすりのそと。○鏘夏 鏘も夏も金属や鈴・玉などが鳴る音。○所思 思慕するひと。

日々瞻望王城不勝悲歎偶書 日々王城を瞻望しては悲歎に勝えず偶書す

城古轉蒼茫 城は古く 転蒼茫たり

城荒草木長 城は荒れて 草木長ず

龍樓龍既脱 亥元旦／樓繞柱／金龍／打落 龍樓の龍は既に脱せるも

鳳闕鳳猶翔 依然／猶飛 鳳闕の鳳は猶 翔ぶがごとし

本以簫笙殿 當年于／南殿御書／院使樽神子弟／奏楽名爲御座楽 本の簫笙殿を以て

變成劔戟倉 委人以王宮／爲屯兵之處 変じて劔戟の倉となす

一朝一翹首 一朝一たび 翹首しては

愁斷九廻腸 愁に断たれ九たび腸を廻らす

○蒼茫 草や海などが、ひろびろと広がること。○龍樓龍既脱 首里城正殿の竜柱に彫られている竜が、すでにいないというのは、琉球の国王がすでに首里城にいないことを示す。○簫笙殿 首里城の南殿。もともとは、歌と舞いをもよおす南殿が、今は熊本鎮台分遣隊の武器庫に姿を変えていることをいう。

草屋蓬戸新成（文に蓬戸の二字なし） 草屋蓬戸 新たに成る

柴門蓬戸結相宜 柴門蓬戸 結びて相宜し

而畜西原景物奇 而畜す西原の景物奇なり

散去荷錢魚活潑 散りて去く荷錢 魚活潑なり

漲来麥浪燕差池 漲り来たる麦浪 燕池に差す

詩題座右申其志

詩を座右に題し 其の志を申べ

酒釀厨中慰所思

酒を厨中に釀して 所思を慰む

自在任心身自靜

自在に心を任せれば 身も自ら靜なり

此身靜處此吾州(文に州を師と作る) 此身靜なる處 此れ吾が州なり

戊丑六月初五日(戊己之誤―筆写者注) 有從福州回舟因聞向龍光父子于門卒

戊丑の六月初五日(戊己之誤―筆写者注)、福州従り回える舟有り、因りて向龍光父子の門において卒するを聞く

遠掛雲帆万里風

遠く雲帆を掛く万里の風

尺書無色事情空

尺書色無く事情空し

今朝於國尋何日

今朝國において何の日にか尋ねん

去載在門失此公

去載門に在りて 此の公を失う

泉路雲昏哀鶴弔

泉路雲昏に 鶴弔を哀しみ

天涯星殞訴葵裏

天涯に星殞れ 葵裏に訴う

龍光喪子龍鐘淚

龍光子を喪い 龍 涙を鐘あむ

長染英雄兩袖紅

向公子八月初五日平令 / 子廷選戊六月初二日卒 長く染めん英雄兩袖の紅

○鶴弔 人の死をくやみに行くこと。晋の陶侃の母が死んだ時、ふたりの人がくやみに来て、鶴になって飛び去ったという伝説による(「陶侃伝」)。

哭毛文達先生（其一） 毛文達先生を哭す

榕城自別離 別離してより

荏苒歲華移 荏苒として歲華移る

唯有江頭月 唯有り 江頭の月

曾無雁足信 曾て無し 雁足の信

人言影拔切 人は言う 影抜 切なりと

君死故情悲 君が死 故より情悲し

今得南來信 今 南來の信を得て

夢々尚抱疑 夢々 尚 疑いを抱く

同（其二）

死者復如斯 死者復た斯の如し

孤忠世所欺 孤忠 世の欺く所

幽魂迷海角 幽魂 海角に迷い

白骨暴天涯 白骨 天涯に暴す

游子回家處 游子 家に回える処

故人入夢時 故人 夢に入るの時

恍看君把筆 恍として看るがごとし 君が筆を把りて

談笑畫蘭芝 先生最精丹青生平得意之時／輒畫竹葉以爲高興 談笑して蘭芝を画くを

○孤忠 ただひとりがんばって忠義を尽くすこと。○幽魂 死者のたましい。幽鬼。幽霊。○蘭芝 芝蘭のこと。めでたい靈芝とかおりよい蘭。道德や才能のすぐれた人のたとえ。

同 (其三)

畫蘭臨別贈 文達留別／贈墨蘭 蘭を画き別れに臨みて贈る

墨跡尚淋漓 墨跡 尚お淋漓たり

嬰鏢慶翁壯 嬰鏢たる翁の壮なるを慶び

仇離繫我思 仇離 我が思いを繫ぐ

忘家終厭世 家を忘れ終に世を厭う

報國早乘時 国に報いんと早に時に乗ず

寄語諸君子 寄語す諸君子

莫吟破膽詩 吟ずる莫かれ 膽を破る詩を

○淋漓 元氣や筆勢などの盛んなさま。○仇離 別離をいう。『詩經』「王風」に「有女仇離」とある。

重登佳趣樓 庚寅二十三年 重ねて佳趣楼に登る

樓高落々接天関 楼高く落々として天関に接し

登去桂枝也可攀 登りて去けば桂枝また攀づ可し

其奈欲吟今夜月 其れ奈んぞ吟せんと欲す 今夜の月

當年曾照故人顔 (文に照を追に作る) 時故良朋友人等 / 尚在樓中讀書 當年 曾て照らす 故人の顔

讀佳趣樓記 毛汝楫毛汝樓馬維馨麻國 / 寶敷人共作此記

佳趣樓記を読む

竹樓之記與蘭亭 竹樓の記 蘭亭と与にす

騷客文人喜覓覓 騷客文人 喜びて覓め覓む

不懷病舌夢生間 懷わず 病舌夢生の間

更讀丞相家内記 更に読む 丞相家内の記

○蘭亭 浙江省紹興市の南西にあった亭の名。晋の王羲之に「蘭亭記」がある。

○騷客 詩人のこと。○覓 のぞむ。

◎黒頭巾の『薩摩と琉球』のみに見える作品

叔母を哭するの七律四首(其の一)

荏苒光陰疾自梭 荏苒たる光陰 梭より疾し

叮嚀之子莫蹉跎 叮嚀の子 蹉跎する莫れ

感恩風木情何極 感恩す風木 情何ぞ極まらん

悵望雲山恨更多 悵望す雲山 恨み更に多し

廻首一生能聚散 廻首す一生 能く聚散せん

凝眸千古既消磨

凝眸すれば 千古既に消磨す

瓶之馨矣維疊耻

瓶の馨るは 維れ疊の恥

不忍哀々讀蓼莪

忍びず 哀々として蓼莪を読むに

○叮嚀 ねんごろにたのむ。ひそかに琉球を脱出して清国に嘆願をしたことをいう。

○瓶之馨矣維疊耻 『詩經』「小雅・谷風之什・蓼莪」にある句をそのまま使用している。

法蘭仇屬國

法蘭 屬國に仇す

皇上詔長征

皇上の詔ありて長征す

命重能謀將

命は重し 能く將と謀り

令嚴敢死兵

令は嚴なり 敢えて兵と死せん

旌旗分隊燦

旌旗 隊を分ちて燦とし

刀斗擁軍鳴

刀斗 軍を擁して鳴る

駕到琉球館

駕して琉球館に到れば

焚香鼓舞迎

香を焚きて鼓舞して迎う

福州に在りて、酒に對し遙かに家郷を思ふ

高樓望烟渚

高樓 烟渚を望み

歌舞惱青春

歌舞 青春を悩ます

| | | |
|-------|--------------|--------|
| 恨纏桃花麝 | 恨みて綴る | 桃花の麝 |
| 情凝柳葉顰 | 情を凝らす | 柳葉の顰 |
| 琴清憐玉指 | 琴清く | 玉指を憐む |
| 酒暖濕朱唇 | 酒暖く | 朱唇を湿おす |
| 憔悴君知否 | 憔悴す君知るや否や | |
| 香闌入夢頻 | 香闌 夢に入りて頻なるを | |

戲贈友人の四絶

| | | |
|---------|---------|-----------|
| 鴛鴦欵枕綠鬢低 | 鴛鴦枕を欵て | 綠鬢低し |
| 恨殺長鳴天上鷄 | 恨殺 長鳴 | 天上の鷄 |
| 憶得大名半開戸 | 憶い得たり | 大名半ば戸を開くを |
| 牡丹帶雨曉雲迷 | 牡丹雨を帯びて | 曉雲に迷う筆者注 |

「大名は、自注に、妓の家名なりといふ。」（黒頭巾―筆者注）

佳句を拾う

| | | |
|---------|-------|------|
| 一更明月三更雨 | 一更の明月 | 三更の雨 |
| 百載生涯萬載愁 | 百載の生涯 | 万載の愁 |

俗情已逐曇花落
禪思更隨貝葉翻

俗情 已に曇花を逐いて落ち
禪思 更に貝葉に随いて翻る

却怯艸堂嫌俗客
雲深三徑鎖青苔

却って怯る艸堂俗客を嫌うを
雲深き三徑 青苔を鎖す

聊雖忘物我

聊か物と我を忘るといえども

白髮對花慙

白髮 花に対して慙づ

不改青雲志

改めず 青雲の志

因知白髮情

因りて知る 白髮の情

耐寒占獨秀

寒に耐えて 独り秀を占む

避俗殿群芳

俗を避けて 群芳に殿る

儼謂無情有情事

儼は謂う 無情有情の事

言窮大息思何窮

言窮まりて大息す 思い何ぞ窮まらん

靜觀齋學則

靜觀齋學則

一 夫學儒者、酣志史記、沈心經傳、朗眼挑手燈花、傾身聽鷄聲、以懈惰爲警敵以眈勉爲妻子、若斯者竟鱗甲可以躍龍門焉

夫れ儒を学ぶ者は、酣たしみて史記に志し、心を經伝に沈め、眼を朗らかにして手に灯火を挑かげ、身を傾けて鷄声を聴き、懈惰を以て警敵と爲し眈びん勉を以て妻子と爲す、斯くのごとき者竟に鱗甲もて以て龍門に躍る可し。

一 夫人以才不才不可論、好不好也。縱令有英才不學、則甚才卒滅矣。亦雖爲不才勤學、則才生長而遂可以爲經濟之大才矣。故云、步而不休跛躄千里。宜哉、宜哉、諸語。

夫れ人は才不才、好む好まずを以て論ず可からず。縱令英才あれども學ばざれば、則ち甚しきは才卒に滅す。

亦不才なりといえども學び勤むれば、則ち才は生長して遂に以て經濟の大才となる可し。故に言う、歩みて休めざれば跛躄千里なるべし。宜しきかな、宜しきかな、諸の語。

一 學問之道在選友。朋友之交、在責善。夫勿以富貴取之、勿以貧賤舍之、只取舍其善惡焉耳。

學問の道は友を選ぶに在り。朋友の交は、責善に在り。夫れ富貴を以てこれを取ること勿れ、貧賤を以てこれを舍つること勿れ、ただ取舍は其れ善惡のみ。

一 書生平日講讀經傳、到所問與所難、則掩卷閉目可以着工夫、而後叢卷觀之、則豁々然自有得於心矣。

書生平日經伝を講讀し、問う所と難き所に到れば、則ち卷を掩おい目を閉じて以て工夫を着す可し、而る後卷を叢してこれを觀れば、則ち豁々然として自ら心に得る有り。

一 毎月須立課程而作論文。唯要理勝而不要巧于點綴也。若理勝則體用分明。血脈貫串文格不待化飛而羽毛豐滿也。毎月須らく課程を立てて論文を作る可し。唯だ理の勝るを要して點綴に巧みなるを要せざるなり。若し理勝れ

ば則ち体用は分明なり。血脈文格を貫申すれば化して飛ぶを待たずして羽毛豊満なり。

一 柳爲俗文耶。代言而濟用亦不可以廢焉者也。

柳は俗文となすか。代言して用を濟すには亦た以て焉を廢す可からざるなり。

一 夫初學詩者、毎日須稿一絶、聊以落筆之助得其進益者也。然學未優則情思不正、而爲其詩也俚焉、學者不可不鑑戒也。

夫れ初めて詩を学ぶ者は、毎日須く一絶を稿して、聊か以て落筆の助とし其の進益を得るべき者なり。然るに学びて未だ優ならざれば則ち情思正しからず、しかも其の詩たるや俚し、学ぶもの鑑戒とせず可からざるなり。

一 臨池學書宜學心畫而不可學天畫也。汝等不見王右軍蘭亭記米舍人獅子贊乎。飄飄遐騰于雲漢之表。

池に臨みて書を学ぶには宜しく心画を学ぶべくして天画を学ぶ可からず。汝ら王右軍の蘭亭記・米舍人の獅子贊を見ざらんや。飄飄として雲漢の表に遐騰せるを。

一 白日卓乎煮茶焚□、須彈算盤之連珠而切却睡魔也。若算術不精則不能講窮經書之蘊奧也。

白日卓乎として茶を煮て□を焚く、須く算盤の連珠を弾きて切に睡魔を却くべきなり。若し算術に精しからざれば則ち經書の蘊奧を講窮する能わざるなり。

一 夫學問者、專在得造化萬物之理於心矣。唯匪誦讀評論而已之謂也。或與友人携手聯襟、尋山水之妙境、探風雲之變態、伴縉蠻鳥聲、而賦詩、臭馥郁花氣而酌酒、間敲棋、趨麋鹿、靜彈琴和泉水、翻宵々之道服於清風、而耀峩々竹冠於明月、飄然從蜂樹、竟去穿江湖、貯厥妙趣胸中、描厥仙山網上掛諸坐右、可涵養以平生之志氣也。

夫れ學問は、専ら造化万物の理を心に得るに在り。唯だ評論を誦説するのみに匪ざるの謂なり。或は友人と手を携え襟を聯ねて、山水の妙境を尋ね、風雲の変態を探り、縉蛮たる鳥声を伴いて、詩を賦し、馥郁たる花氣を

臭ぎて酒を酌み、間には棋を敲き、麋鹿を趨らせ、静かに琴を弾じて泉水に和し、青々の道服を清風に翻えし、岌々たる竹冠を明月に耀し、飄然として峰巒に従えば、竟には去きて江湖を穿ち、厥の妙趣を胸中に貯へ、厥の仙山を網上に描きて諸を座右に掛け、以て平生の志気を涵養すべし。

一 夫爲書生者、生平必靜必清、小心大膽、看千金如瓦礫、見六籍如飢渴、貧賤之人可親愛、富貴之人不可馴近、慎之哉、戒之哉。

夫れ書生たる者、生平必ず静かに必ず清く、小心大膽にして、千金を看ること瓦礫の如く、六籍を看ること飢渴の如く、貧賤の人は親愛すべく、富貴の人は馴れ近づく可からず、これを戒めんかな。これを戒めんかな。

一 噫爾曹以今日之所學、欲爲他日之德行乎。抑以之攘斥世人欲爭利涉歟。假使贏得一時令名、於身還將何益乎。願避名修德愛身、如趙璧而雖連城之重價、不可鬻之於市矣也。

噫 爾曹今日の學ぶ所を以て、他日の德行と爲さんか。抑そも之を以て世人を攘斥し利涉を爭わんと欲するや、假使一時の令名を贏ち得たるも、身に還た將て何の益あらんや。願わくは名を避け徳を修め身を愛せん、趙璧の如くにして連城の重價なりと雖も、之を市に鬻ぐ可からざるなり。

右十二章掲其要尤者而示之。惟在書生爲與不爲而已。

右十二章は其の要の尤なる者を掲げて之を示す。惟書生の爲すと爲さざるとに在るのみ。